

コテンラクゴ? 演<sup>や</sup>るんですか?? 演<sup>や</sup>るんです! :  
五技能の習得をめざして<sup>1</sup>  
We're doing traditional *rakugo*!  
Striving towards acquiring the 'five' skills through performing *rakugo*

入野みはる, コロンビア大学  
Miharu Nittono, Columbia University

## 1. はじめに

「ええっ? コテンラクゴ? やるんですか」それが、私が担当する五年生<sup>2</sup>の学生に日本語科の春祭りの出し物として古典落語をやろうと思っていると告げた時の第一声であった。本稿では、このように古典落語をやることに初めは非常に消極的であった学習者たちが、古典の面白さ、語りの面白さを知り、最後には150人の聴衆を前に自ら「演ずる」までの過程とその教育的効果を紹介する。

ところで、なぜ、今、落語なのだろうか。読者の皆さんは「タイガー&ドラゴン」というドラマをご存知だろうか。これは、2005年に日本で放送された落語家を主人公にしたコメディータッチのドラマである。これが落語人気の火付け役となり、今、寄席に足を運ぶ若者が増えていると言う。こうした今日の落語ブームに注目し、コロンビア大学でも2006年より落語を授業の中に取り入れている。

## 2. 落語とは何か

では、まず、落語とは何かについて考えてみたいと思う。

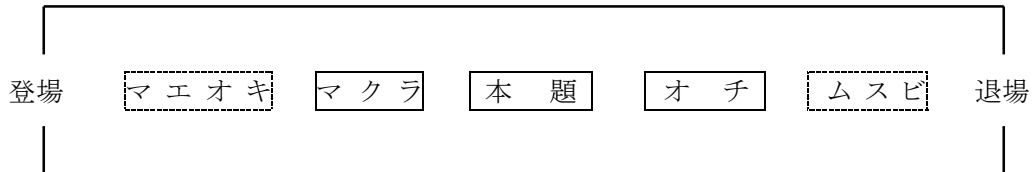
1678年に書かれた「正直しょうじきはなしたいかん 噺大鑑」(白の巻・第十卷)には、落語は「壺かおち、式か弁舌、三かしかた」とある。これは、落語の主題、手法、形式としてとらえることができる。まず、主題についてであるが、お伽話から、身の回りの世間話にいたるまで、きわめて広く、登場人物もさまざまである。また、ごく自然な会話を主体にして話を運び、会話であることを際立たせるために、例えば、大家さんが右を向いてしゃべれば、熊さんは左にと首の向きを変える、「上下を切る」という手法がとられている。現代でも原則的には  
①高座に座し ②和服を着て ③扮装、背景の助けを借りず ④扇、手拭いのみを小道具とするという形式を保っていると言われている。

<sup>1</sup> 本研究を進めるにあたりコロンビア大学日本語学科のナズキアン富美子氏、江口茂氏、岡本桂子氏、畠山衛氏、佐藤慎司氏、浜田英紀氏、野口敬未氏には多大なる援助、助言をいただいた。ここに記して、心より感謝の意を表したい。また、撮影、並びに口演の一般公開を快く承諾してくれたコロンビア大学・日本語五年生の学生諸氏にもこの場をかりて謝意を表したい。

<sup>2</sup> 日本語能力試験の一級に合格しているレベルである。

さらに、落語は、**図1**に見るように、ふつう、マクラ、本題、オチの三部分で構成されている。マクラは噺の導入部分であり、本題は噺の中心部分である。オチは、落ち着くところの意味で、噺の終わりであると同時に、口演の終わりでもある。

**図1** 落語の構成



次に、談話という面から落語をとらえてみよう。落語を談話と捉えた場合、送り手 (P) と受け手 (Q)、会話の中に登場する人物である送り手 (x) と受け手 (y) との関係から、以下のように三種類に分類でき、落語家は原則的にはこの三種類の発話をおりませながら噺を進めていくことになる。

- ①地 演者 P の聴衆に対する発話  $P \Rightarrow Q$
- ②独白 登場人物 x の発話  $P(x) \Rightarrow Q$
- ③対話 登場人物 x の y に対する発話  $P(x \rightarrow y) \Rightarrow Q$

### 3. 落語活動の目的と活動内容について

次に落語活動の目的と活動内容について述べたい。まず、今回の活動は、落語を演じる過程を通して、四技能（話す、聞く、読む、書く）を超えた「演じる力」をいかにして養うか、また、「演じる力」を養うことが日本語の言語能力にいかなる影響を及ぼすかを調査することにあつた。実施年月日は2006年から2009年までの各春学期で、すでに4回にわたって活動を行ってきたが、紙幅の都合上、本稿では特に2009年の活動に焦点を当て、詳しく見ていくことにする。

筆者が担当する五年生のクラスは週2回で1回が75分なのだが、そのうちの15分を落語の授業に充て、24回すなわち、計6時間をクラス内活動に割いた。加えて、宿題、練習などのクラス外での活動を10時間ほど行ったので、学生がこの落語活動に費やした時間の総数は16時間となる。24回に及ぶクラス内活動の詳細は次ページの**表1**を参照されたい。

**表 1** 手順とクラス内活動 (2009年春学期の場合)

クラス	授業内容	教材・宿題・備考
1回	落語ってなに？(導入)	古今亭志ん生(五代目)『後生鰻』(1960年代ラジオ番組)を聞く。
2回	落語の三大要素	噺本『正直咄大鑑』白の巻・第十「はなしの仕様」(1687) 山本進(編)落語ハンドブック
3回	落語の構造	山本進(編)落語ハンドブック(抜粋)、落語の言語学
4回	談話としての落語	山本進(編)ハンドブック(抜粋)、落語の言語学
5回	落語のイメージ	桂文珍『落語は21世紀に生き残れるか』を読む。 場面練習 いっぱちや〜い
6回	落語における表現の工夫	現代のものを江戸時代の人はどう説明する？(コンピュータは？ イーメールは？ ケイタイは？) 空飛ぶ鉄の船ってなに？
7回	人物の型、動作の型について	春風亭小朝の「稽古屋」のビデオを見る。
8回	扇子、手ぬぐいの使いかた	マイ扇、マイ手拭いを日本語科より支給。
9回	落語の種類	山本進(編)落語ハンドブック(抜粋)
10回	古典落語の定番2題紹介	よく知られている2つの落語(①あたま山、②時そば)を読み、演じてみる。(あらすじは参考資料参照)
11回	古典落語の定番さらに2題紹介	よく知られている2つの落語(③まんじゅうこわい ④高田の馬場)を読み、演じてみる。(あらすじは参考資料参照)
12回	各自、4つのうちから一つ選んで覚えてきてクラス内で発表	クラスメートからフィードバックをもらう。
13回	春祭りで自分が演じたい演目を決定	古典名作選其の一・其の二を聞く。 落語のマクラを自分で書いてみる。落語の SCRIPT(口演時間12分ぐらいのもの)提出。
14回	なりきり練習	マンガ落語を見ながら、その人物になりきって演じてみる。
15回	最近の落語ブーム	TBS テレビドラマ 「タイガー&ドラゴン」を家で見てくる。
16回	よい落語とは:落語の評価について	落語を評価するための評価表作成。
17回	出囃子について学ぶ	出囃子のテープを聴く。
18回	予選会準備	実際に演じ、クラスメートからコメントをもらう。
19回	予選発表会	着物を着て高座で口演。日本語教師並びに TA に観客として発表を見てもらい、7名の中から上位3名を選出。ビデオに撮る。
20回	春祭り出場者リハーサル	予選の時とったビデオを見、クラスメートからフィードバックをもらう。
21回	春祭り出場者リハーサル	クラスメートからフィードバックをもらう。ストーリーの書き換え。
22回	春祭り出場者リハーサル	クラスメートからフィードバックをもらう。声色、動作などの修正。
<b>春祭り</b>	本番:5人の審査員ならびに100人を超える観客の前で披露(審査員は学生が作った評価表を用いて評価)	2009年春 演目:時そば、青菜、転失気(てんしき) [優勝者(1位)は日本への往復航空券獲得権取得]
23回	落語活動を顧みて	アンケートとインタビュー実施。
24回	落語を演じた思いを漢字で表現	筆と墨を使ってマイ扇に漢字を入れてみる。

\* 毎回授業の初めに5分ほど発声練習などのウオーム・アップを行った。

まず、1回目のクラスでは50年ほど前にラジオで放送された古今亭志ん生『後生鰻』の一部を聞かせた。実際、酔っぱらっているようなしゃべりの噺家として定評のある志ん生であるが、あえて、一番聞きにくい、しかもラジオで半世紀ほど前に放送された作品を1回目に持ってきたのには理由がある。それは、テレビを始めとする映像文化が先行して、人は画面に映ったもの、見たものしかわからなくなってきている。ところがそうではなく、落語はイメージする面白さであり、たとえ落語家の表情や仕種は見えなくても、話芸だけでたっぷり想像できるという落語の真髄を初日に紹介したかったからである。

2回から4回までのクラスでは、上記、落語とは何かの項目で紹介した落語の要素、構成などについて学んだ。5回目は、落語の魅力について講義した。例えば、「二人が小さな船に乗って、沖へ沖へ、ずーっと遠くなって、彼方へ点になって消える」などというフレーズは言葉にすると非常に簡単であるが、実際に映画化すると大変である。このように実際に映像にしにくいこと、できないことが言葉の表現だけでできるというのが落語の魅力だと言えよう。

さて、6回目は表現の工夫についての授業を行った。落語家、桂文珍（2000）はこう述べている。「江戸時代の落語をしている時に、ひと言ポンとカタカナが入ってしまうことで古典落語の世界をこわしてしまうことがある。例えば、『宿屋の仇討ち』という古典の中で、宿屋に泊まった三人連れが昔の恋沙汰を語って聞かせる場面で、『奥方がな、そなたは笹はたべぬか？<sup>3</sup>と訊ねた』『え、源さん、笹食べるの？』の問いに『オレはパンダか』と言ってしまうと落語がこわれる。そこを『オレは唐土の熊貓じゃあねえんだ』と変えると古く聞こえますし、なんとなく安心感がある。こういう表現の工夫をしながら、落語をこわさないように、また笑いも削らないようにして時代に合うようつくり直していく必要がある」と。

そこで、筆者は、学生に「テレビ」「ケイタイ」「飛行機」など文明の利器を、この「唐土の熊貓風」に表現し直してみるよう指示した。学生からは、例えば、「電気の紙芝居」、「糸のみえない糸電話」「空飛ぶ鉄の船」など、創造力に富んだ非常におもしろい答えが返ってきた。

次に7回目のクラスでは「人物の型、動作の型について」、8回目には「小道具の使いかたについて」学んだ。9回目のクラスでは、現在演じられている落語の数とその種類について講義した。そして、10回目、11回目のクラスでは、落語の定番『まんじゅうこわい』『時そば』そして、『あたま山』『高田の馬場』の四つの作品を声に出して読んでみた。（この四つの噺のあらすじについては本稿末 **参考資料1** を参照のこと。）例えば、『時そば』の「おっ、割り箸使ってるね、物は

<sup>3</sup> あなたはお酒は飲みませんかの意。

器でくわせるってえが、いい井だ！」のような、江戸言葉独特の言い回し、発音のところでは学生は四苦八苦しているようであった。

そして、12回目は、先の四つの噺のうち学生が一番気に入ったものを一つ覚えてきて、クラス内で演じ、クラスメートからフィードバックをもらった。



13回目の授業では、日本語科の春祭り<sup>4</sup>で自分が演る落語の演目を選んだ。14回目は、マンガ落語を用いて「なりきり」の練習を行った。『芝浜』の一場面を画いたマンガを用意したので（左手）、読者諸氏もこれを使って、一人二役で、この「なりきり」を演<sup>や</sup>っていたきたい。

主人公は魚屋の勝太郎である。酒におぼれ、仕事をしないぐうたら亭主。昨日、芝浜で拾った50両の財布があるんだから、当分は遊んで暮らせると、女房に酒を買ってこさせ、そのまま酔いつぶれて寝てしまう。もう一人は、拾ったお金が亭主をもっとダメにしてしまうと思い、そんな財布は知らないと言い張る女房である。その人物になりきって感情をこめて噴出しの中のセリフを言っていたきたい。

15回目はドラマ「タイガー&ドラゴン」を紹介し、最近の落語ブームについて考えた。また、16回目の授業にあっては「よい落語とは何か」について話し合った。次ページの表<sup>2</sup>は、その話し合いをもとに作成した落語評価表である。「間の取り方は適切だったか。」「静」と「動」をうまく使い分けたか」など、全部で15項目にわたっている。17回目には高座に上がる際に楽屋で演じるお囃子、出囃子をいくつか聞き、落語と音楽の関連性について考えた。

<sup>4</sup> 2005年より行っている日本語科主催の学生発表会。一年生から五年生までの学生が一年に一度、四月の第二金曜日に集まり、これまで培ってきた日本語の力を披露する。2008年にはドナルドキーン教授を、また2009年にはNY領事などを審査員に迎え、盛大に執り行われた。

表2 落語評価表

# 落語 評価表

演目：  
演者：

あてはまる方に○をつけてください。

- ① マクラが面白く、本題とうまくつながったか.....はい いいえ
- ② 声の大きさは適切であったか.....はい いいえ
- ③ 話すスピードは適切であったか.....はい いいえ
- ④ 発音はよかったか.....はい いいえ
- ⑤ 登場人物に合わせて声の調子を変えたか.....はい いいえ
- ⑥ 語り手と登場人物の差がはっきりしていたか.....はい いいえ
- ⑦ 感情移入していたか.....はい いいえ
- ⑧ 間の取り方は適切だったか.....はい いいえ
- ⑨ 「静」と「動」をうまく使い分けていたか.....はい いいえ
- ⑩ 体の動きはよかったか.....はい いいえ
- ⑪ 小道具を効果的に用いていたか.....はい いいえ
- ⑫ 「ない」ものを「ある」ようにみせたか.....はい いいえ
- ⑬ 最後が「すとん」と落ちたか.....はい いいえ
- ⑭ 話の内容が分かったか.....はい いいえ
- ⑮ 話はおもしろかったか.....はい いいえ

「はい」の数を□の中に記入してください。

コメント：

---

---

18回目の授業では、衣装合わせなどを含めたりハーサルを行った。19回目のクラスは、日本語科講師、TAを審査員に迎え、春祭りに出場する学生を決定するための予選会を行った。今年は7人の五年生がおり、その中から上位3名を選出した。20回、21回目のクラスでは、予選会の時に撮影したビデオを見ながら、クラスメートからフィードバックをもらい、ストーリーの加筆修正、並びに、声色、動作などの最終調整を行った。

そして、ついにその日がやってきた。予選会で選ばれた3人が100人を超える聴衆、NY 領事、コロンビア大学文学部教授などの審査員を迎えての「2009年春祭り」本番に臨むこととなった。春祭りには低学年の学生も数多く出席するため、春祭りのプログラムには、演者自らが数行にまとめた英語のあらすじを入れた。

(本稿末[参考資料2](#)参照。) 当日は3人とも大熱演し、満場の聴衆から大喝采を浴びた。(以下は2009年春祭り：3人の演者による熱演の様様。)



『青菜』の一場面



『時そば』の一場面



てんしつき  
『転失気』の一場面

#### 4. 落語活動に関するアンケートとインタビュー実施

さて、春祭り終了後の23回目のクラスでは、この落語活動に関して、学生に簡単なアンケートを実施した。聞く、書く、読む、話す、そして、演ずるに関して、自分で上達したと思う能力に○をつけてもらった。[表3](#)のアンケートの分析結果をご覧ください。これは2006年から2009年までのアンケートの結果である。<sup>5</sup>

**表3** 落語活動を通してどの能力が伸びたと思うか  
(回答者総数 2006年5人+2007年1人+2008年3人+2009年7人 計16人)

	話す力	聞く力	読む力	書く力	演ずる力
回答者数 (16人)	16	13	14	14	16

<sup>5</sup> データの信頼性をより高めるためにここでは2006年から2009年の総合結果を提示した。

この4年間に落語活動に参加した学生は全部で16人であったが、その学生の全てが「話す力がついた」と答えており、その他の三技能（聞く、読む、書く）についても力がついたと答えている。また、16人中16人が「演ずる力がついた」と答えており、落語を演ずるという活動が学習者に総合学習の場を提供し、四技能に加えて、「五番目の技能」、すなわち、「演ずる能力」を養う有益な場であったことが分かった。

さらに、インタビューで得られた学生からのコメントの一部を紹介すると、「自分の演技で人が笑うのはすごいことだと思った。」「古典の中には現代に通じる笑いの要素がたくさんあることがわかった。」「春祭りで落語をやってから、時々、日本人や下級生から声をかけられることがあり、有名人になったような気がする。」等々。（詳細は表4参照。）

**表4** インタビュー内容分析

分類	例
口演活動に関するもの	演じるのは非常におもしろいと感じた。 自分の演技で人が笑うのはすごいことだと思った。
日本語学習に関するもの	表現・コミュニケーション能力がついた気がする。 発音やイントネーションがよくなった。
学習活動に関するもの	クラスメートと互いに教えあうことで日本語の習得が促進された。
日本文化に関するもの	日本人にとって笑いとは何か少し理解できた。 日本人独特の仕草、動作について学んだ。
古典学習に関するもの	古典は古臭いものという先入観があったが、本当はおもしろいものだとわかった。古典の中には現代に通じる笑いの要素がたくさんあることがわかった。
学習者の変容に関するもの	春祭りで落語をやってから、時々、日本人や下級生から声をかけられることがあり有名人になったような気がする。自分自身に自信が持てるようになった。

また、2007年にただ一人の五年生として高座にあがった学生は「落語をやることで自分自身に、そして自分の日本語に自信がもてるようになった。実際、こんなに大変なことが大勢の前でやれるとは思わなかった。日本語を本当の意味で身につけるには演じる力が必要だとわかった。古典を通して、この演じる力を自分のものにできたことが自信につながったと思う」と述べている。

これらの調査から、五年生は落語の授業を非常に肯定的に捉えているということが明らかになった。これは落語を日本語の学習に取り入れることの有効性を示す一つの指標となるのではないかと考えられる。

そして落語活動の最後のクラス、24回目のクラスでは、この過程のしめくくりとして今学期初日に日本語科が各学生に支給したマイ扇に、「落語を演じて今ど



う思うか。どんな言葉が頭の中に浮かぶか」--それを、墨と筆を使って、漢字で書いてもらった。「明」「天」「酒、金、女」「風」など学生は自由に思いを表現していた。

## 5. おわりに

「子供の頃から演劇だけはダメでした。先生、落語だけは勘弁してください」と今学期（2009年春学期）の初めからずっと哀願し続けていた学生の言葉を引用して、本稿のまとめとしたい。

死んでもやるまいと思っていた落語を、私はついに  
やってしまいました。でも、やってよかったです。  
生涯忘れることのできない、いい経験になりました。  
自分の日本語が一步も二歩も前に進んだ気がします。  
先生、これからも学生の肩を押し続けて、「コテンラクゴ？  
演るんですか??」を「演るんです!」に変えていって  
ください。<sup>6</sup>

## 参考文献

- 岩崎均史 2004 『落語の博物誌—江戸の文化を読む』 吉川弘文館  
小佐田定雄 2005 『5分で落語のよみきかせ』 PHP 研究所  
暉峻康隆 1978 『落語の年輪』 講談社  
馬場 雅夫 1973 『落語の味わい方』 明治書院  
山本進 2006 『図説 落語の歴史』 河出書房新社  
Brown, H. Douglas. 2000. Principles of Language Learning and Teaching (Fourth Edition).  
Prentice Hall College Div.  
Larson-Freeman, Diane. 2000. Techniques and Principles in Language Teaching (Teaching  
Techniques in English as a Second Language) (Second Edition). Oxford: Oxford University  
Press.  
Omaggio Hadley, A. 2001. Teaching Language in Context (Third Edition). Boston: Heinle &  
Heinle.  
Richards, Jack C. and Theodore S. Rodgers. 2001. Approaches and Methods in Language  
Teaching (Cambridge Language Teaching Library) (Second Edition). Cambridge: Cambridge  
University Press.

<sup>6</sup> 学生からの許可を得て、本研究発表では学生の実名、実像、インタビュー内容を使用させていただいたことをここにお断りする。

参考資料 1

クラスで紹介した古典落語 あらすじ

分類	演題	あらすじ
長屋噺	まんじゅう こわい	若いものが寄り集まって、それぞれ世の中で何が一番怖いかという話になる。俺は蛇が怖い、蜘蛛が怖いと言い合っているのを横目で見て俺は怖い物なぞないとせせら笑っていた奴、本当に怖いものは何かと問い詰められると、にわかには震えだし、実は饅頭が怖くて、それを思い出させぬため強がりやを言っていたと白状して寝込んでしまう。普段からおもしろくない奴だからうんと怖がらせてやろうと、みんなで饅頭を買ってきて枕元へ並べ、無理に起こすと、怖がる振りをしながらせせと食べてしまう。「この野郎、お前が本当に怖いのは何だ」「今度は濃いお茶が一杯怖い」
与太郎 噺	時そば	屋台の二八そばを、みえずいた世辞を言いながら食べた男、代金十六文を払うのに、「ひとつ、ふたつ、みっつ」と、一文ずつ渡していき、「ななつ、やっつ、いま何時で」ときく。そばやが「へえ、ここつ(午前〇時)で」「とお、十一、十二・・・」と一文ごまかす。これを見ていた与太郎、明るく晩、小銭を用意して待ち構え、前夜の男の真似をして世辞をいいながら、まずいそばを無理に食った上で、「ひとつ、ふたつ、みっつ・・・ななつやっつ、いま何時で」「へえ、よっつ(午後十時)で」「いつつ、むっつ・・・」
粗忽・ 強情噺	あたま山	サクランボの種を食べた男の頭から、によきによきと大きな桜の木がはえてきて、皆がその下で、ドンチャンドンチャンとにぎやかに花見を始める。うるさかった男が桜の木を引き抜くと、後にはポッカーリと大きな穴が。この穴に雨水がたまり、いつしかフナだのドジョウだのがすみつく。すると、子供が釣りに来て、朝から晩まで笑ったり、泣いたり、わめいたり。中には石を放り込んだりするものまでいて、こううるさくちゃ、たまらないと、男は頭の池にドボンと身投げする。
大名・ 武家噺	高田の馬場	浅草で蝦蟇の油を売っていた姉弟が老武士を「親の仇」と叫び、敵討ちを挑もうとする。老武士は寺の境内で血は流せぬから明日高田馬場で勝負しようという。翌日、高田馬場は敵討ちを見物しようとする人、それ相手に商売をする人でごった返すが、定刻になっても当人があらわれない。茶屋で酒を飲んでいる老武士を見つけた男がどうなってるのかとたずねると「私たち親子は仇討ち屋で茶店に頼まれて敵討ちの振りを為してひとを集め売上げの二割をもらっている」

参考資料 2 2009 年春祭り落語演目 (英語)

時そば "Toki Soba"

"Toki Soba" is a classic story of a swindle gone wrong. A man enters a soba shop and asks for a bowl of soba. As he consumes his dinner, he showers the unwitting Soba maker (sobaya-san) with compliments. Then, when it comes time to pay, he counts out

"1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, hey, Soba man, what time is it?"

"Oh, it's 9."

"10, 11, 12, 13, 14, 15, 16. Thanks!"

and disappears without incident. After some careful consideration, the oafish Yotaro figures out the man's scheme and decides to give it a shot. Yotaro, unfortunately, fails to consult the clock before embarking on his misadventure...

(The classic story has been written for a modern audience by the *rakugo* performer, Danny Kelly.)

青菜 "Aona"

"Aona" is a story about a gardener (uekiya) and the various happenings between him and his employer, a retired man (go-inkyō) and him and his wife, Kaka. Unlike his employer and his employer's wife, the gardener and his Kaka are not very clever. So when they attempt to copy the clever "secret" conversation between the master and the master's wife, hilarious results ensue.

(The classic story has been written for a modern audience by the *rakugo* performer, Maria Elizabeth Nonaka.)

転失気 "Tenshiki"

"Tenshiki" is a *rakugo* story about 知<sup>し</sup>ったかぶり ("pretending you know something when you don't"). During a medical exam, a doctor asks a priest whether he has "tenshiki." The priest does not know what "tenshiki" is, but pretends that he knows and says he does not have any. After the doctor leaves, the priest sends Chin-nen, a young priest at the temple, to retrieve a "tenshiki" for him. When Chin-nen learns what "tenshiki" is, he realizes that the priest was just pretending to know what "tenshiki" meant. Chin-nen decides to trick the priest by telling him the wrong meaning of "tenshiki" so that the priest will embarrass himself when the doctor visits the next day.

(The classic story has been written for a modern audience by the *rakugo* performer, Ken Kiyota.)